

研究所だより

上平 泰博

日本人には、山岳信仰(修験道)に象徴される自然崇拜、自然回帰の思想が宿っているといわれ、この世界にはアニミズムやシャーマニズムが登場する。沖縄を代表するアニミズムといえば、ガジュマルの木に宿る妖精キムジナーというように。

自然への畏敬と畏怖は、ホモ・サピエンス以来の人間の本能ともいえる。人類は生きることの緩みを許さない狩猟自然社会において、助けあい、分かちあい、学びあいによって類的な存在であることを知る。20万年を費やして生命を支えあう、支えあえる関係の遺伝子を刻み込んだ。

それは縄文時代における自然崇拜の痕跡からも、土着古神道の萌芽からも窺える。6世紀ころ朝鮮半島の百済から伝来した仏教とせめぎ合いがあった。仏教の信仰対象は、大仏や阿弥陀像など金粉で塗られた仏像体がひと前で現前と見えている。ところが原始神道は岩や森であり川であって、神々の形は物象化され、想像神話に入り込まないと、その実相は見えない。

当時はまだ身近なところに拝仏できる仏体は少なく、「山川草木悉皆成仏」(梅原猛)のごとく自然融和があって、仏教と神道の関係は仏像の神体化や寺院に鳥居が矛盾なく置かれ、江戸末期まで「神仏習合」の形であった。なぜか異質な関係ゆえに共存した。

しかし王政復古と祭政一致によって、明

治政府は1868年「神道国教」化政策を打ち出しで「神仏混淆」を禁止した。幕末から台頭した水戸学派や国学者らの復古神道は天皇神格化に寄与するため、太政官布告による「神仏分離令」(神仏判然令)と「修験道廃止令」(1873)を出した。これは「排仏棄釈」運動へと発展して、全国60%の寺院において仏像破壊が起きたとされる。

天台、真言系の「神仏一体」化に対して、真宗系は神道と対極に位置しながら、神仏分離で一致したところがある。仏教界は総じて「廃仏毀釈」に対する神道国教化の路線に猛反発して巻き返しを図る。「文明開化」で知識人や文化人、政治家らにキリスト教信仰者が増えたことも、神道国教勢力を後退させた。帝国憲法第二十八条には制限付きながら「信教の自由」が認知された。明治の後半まで鎮守の森は膨大にあった。その小さな神社が再編(神社合祀令1907年)され、荒廃していく。そのあり様に和歌山に居た南方熊楠は怒る。科学者熊楠の抵抗運動もまた、自然への畏敬に根ざす行為であった。

明治政府は、儒教、仏教、キリスト教を取り込んで、神道の国教一元化ではなく民衆教化政策へと向かう。つまり教育勅語体制によって国民道徳の形成といった流れを押し出し、神道国教化政策を変質させながら、国民統合支配を強めていくのであった。